

## 「慰む」を通してみた『和泉式部日記』

金 玄 淑

### I

『和泉式部日記』には慰めを求めあう和泉式部と帥宮の姿が数多く描かれている。「慰む」、「慰め」などは、同じ平安朝の日記文学『蜻蛉日記』に三例、『更級日記』に六例しか使われていないのに、両作品より短い『和泉式部日記』には十三例と多出している。『蜻蛉日記』には作者の心情を表す用例はない。『更級日記』の三例は作者が物語、宮仕え、物詣などで、新鮮で、非日常的なものに触れて、心が晴れ晴れしくなることである。それに対して、『和泉式部日記』には作者和泉がほとんどの「慰む」を帥宮との交情の上で用いており、「慰む」という言葉を通して、それぞれの作品の特徴や作者の状況がよく見えてくるのである。慰められることのない『蜻蛉日記』。新鮮な経験により「心」の慰む『更級日記』。それに対して、『和泉式部日記』はもっぱら帥宮との交情を通じてのみ慰められるということになる。

また、「慰む」は『和泉式部日記』だけではなく、和泉式部の歌集『和泉式部集』『和泉式部続集』に廿三首（詞書の二例を含む）、特に、

「慰む」を通してみた『和泉式部日記』

いわゆる帥宮挽歌群の八首にも使われている。「慰む」という言葉は彼女が帥宮との関連でよく使っているもので、二人の恋愛の世界が記されている『和泉式部日記』を考える上で重要であるのが分かる。すでに『和泉式部日記』の「つれづれの慰め」については論じられているが、ただ、「つれづれ」のほうに考察の重点が置かれている。しかし、「慰む」は「つれづれ」を伴わないで使われている場合も多いので、「つれづれ」についての研究をも踏まえ、この作品を「慰む」という言葉を通して考察していく。

「かたらひ」や和歌の贈答——それは歌による「かたらひ」とも言えるが——などで「つれづれ」、無常、「世の中」を慰めようとすると和泉と帥宮との姿を追っていく。すると、「かたらひ」で「慰め」を求める二人の恋愛の性格、贈答歌が一人の恋愛を進展させる不可欠の要素にならざるをえないこの作品の特質、『和泉式部日記』を書いた作者和泉の思いなどがはつきり見えてくると思われる。

### II

まず、「慰む」が使われている場面を取り上げてみると、次の表

のとおりである。

五	四	三	二	一
六月	四月			四月
宮も、いふかひなからず、つれづれの慰めにとはおぼすに、ある人々聞ゆるやう、	聞えたり。 か、れどもおほつかなくも思はえずこれも昔のえにこそあるらめと思ひ給ふれど、慰めずは、つゆ」と	『生ひたる蘆』にて、かひなくや」と聞えつ。	あはれなる御物語聞えさせに、暮にはいかゞ」とのたまはせられたれば、慰むと聞けばかたらまほしけれど身のうきことぞいふかひもなき	かくて、しばくのたまはする、御返も時々聞えさす。つれづれも少し慰む心地して過ぐす。 又御文あり。ことばなど少しこまやかにて、 語らば慰むこともありやせんいふかひなくは思はざらん あはれなる御物語聞えさせに、暮にはいかゞ」とのたまはせられたれば、慰むと聞けばかたらまほしけれど身のうきことぞいふかひもなき
三九頁 地の文 (宮)	二〇頁 手紙文 (和泉)		一五頁 宮の歌	一四頁 地の文 (和泉)

十二	十一	十	九	八	七	六
十二月	一二月	十月	十月	十月	八月	七月
などいふ程に、例のつれづれなぐさめて過ぐすぞ、いとほかなきや。	ゆ。 らにいかせまし、など思ひ乱れて聞ゆ。	慰むる君もありとは思へども猶夕暮は物ぞかなしき	慰む心地す。	などいひて、ありしよりは時々おほしましなどすれば、こよなくつれづれも	ことやある、と思ふなり	あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなし事に、世の中を慰めてあるも、うち思へばあさましう。
九七頁 地の文 (和泉)	九二頁 地の文 (和泉)	八六頁 和泉の歌	七三頁 地の文 (和泉)	六二頁 会話文(宮)	地 の 文 (和泉)	四四頁 四五頁 地の文 (和泉)

十三	一月	あからさまにも参りて、宮たちをも見	一〇三頁
		たてまつり、心もなぐさめ侍らん、と	手紙文
		思ひ給ふる。	(北の方)

二人が会合つてまもない頃、帥宮は兄宮を表に出して和泉に關心を示し、二人の間に二回の贈答があつた後に、例一のような記述がある。

かくて、しばしのたまはする、御返も時々聞えさす。つれづれも少し慰む心地して過ぐす。

帥宮との贈答で和泉の「つれづれ」が慰む場面である。「源氏物語」にも柏木の死後、落葉の宮の母、御息所が夕霧の訪問で「つれづれ」が慰められる場面「今はいよいよものさびしき御つれづれを、絶えず訪れたまふに慰めたまふことも多かり」(夕霧)が見える。これらの「つれづれ」とは人間の死がもたらしたものであり、単なる手持ち無沙汰とは違う。例一の「つれづれ」とは兄宮、彈正宮との死別後、「夢よりもはかなき世の中を歎きわびつ、明かし暮らす」(一一)和泉の感じ続ける孤独感、寂寥感であろう。

この叙述について「恐らく数回の交渉があつたものと見られ、次の『又御ふみあり』まで数日を経過したこと」(五)になるといふ解釈がなされている。しかし、この記述はすぐ前、宮からの贈歌に対して「慣らはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきことも目とままりて」(二四)和泉が返歌をする場面を直接承けるものであり、ただ数日間の出来事の記述ではなく、帥宮と出会つてから何回か特

「慰む」を通してみた『和泉式部日記』

定はできないが、今までの贈答について和泉の心情をまとめて表していると言える。

例一の地の文のすぐ後の、帥宮の贈歌例二、和泉の返歌例三にも「慰む」が使われている。

語らば慰むこともありやせんいふかひなくは思はざらん  
慰むと聞けばかたらまほしけれど身のうきことぞいふかひもなき

ここは亡き兄宮の面影が二人に色こく残されている時期である。その追憶にふけて、孤独感、寂寥感につつまれている和泉の心が話をすれば「慰む」のではないかと帥宮は歌いかける。贈歌で帥宮は「慰む」の主体を和泉としているが、それを和泉はお互いが「慰む」ととつて自分は話の相手になるような人ではないと切り返している。しかし、歌では断っているものの、結局その日、帥宮を受け入れるようになる。例二、例三は直接に話しあうことによつて「慰む」のであるが、この場面はこれからの二人の交情が「慰め」を求めあうことになるのをあらかじめ暗示してくれるものであろう。

この贈答のように、「語らひ」によつて「慰む」ということは、和泉の歌集『和泉式部集』『和泉式部統集』の四首にもみられる。

慰めにみづからゆきて語らはん憂き世の外に知る人もがな

(九六六)

こころみにいざ語らはん世の中のこれになぐさむ事やあるとも

(七〇二)

九六六番の歌は帥宮挽歌群の一首である。帥宮との恋愛が「語らば慰むこと」であつたからこそ、帥宮を失つた今、この世は以前

よりもいっそう「憂き世」であり、そこには語り合う人はいないのである。それで、もののはれを知る人を探し求め、語りたいたいという気持ちがあるであろう。また、同じく帥宮挽歌群に「かたらひし」帥宮を恋しく思い、悲しむ歌、「語らひし声ぞ恋しき俤はありしそながら物も言はねば」(九五六)「目に見えて悲しき物は語らひし其の人ならぬ涙なりけり」(九五七)が見える。

七〇二番の歌は「語らばむ」という男性に送った歌で、「かたらひ」、恋により「慰む」という和泉の思いが歌われている。

また、恋人ではなく、ただの友達との「語らひ」によって「慰む」という歌もみえる。

語らへばなくさむ事もあるものを忘れやしなん恋のまぎれに

(一七四)

語らへば慰みぬらん人しれずわが思ふ事を誰に言はまし

(一三四九)

一七四番の歌は女への贈歌の代詠を求めた男友達に、その歌を送るついでに送ったもので、恋仲ではなくても、「語らへばなくさむ」こともあると歌っている。また、一三四九番の歌は女友達が二三人おしやべりするのを見て、自分の悩みは誰に打ち明けたらよいのかと訴えている。このような和泉の歌には、あふれる何かをつねに誰かに話し、打ち明けたい、そして、わかってもらいたいという彼女の思いがこめられている。

これらの歌にみえる「語らへば」「語らばば」に「慰む」が接続する用例は、『新編国歌大観』を調べたところ、和泉式部以前の歌には見当たらないのに、和泉がよく使っているのも注目すべきこと

である。和泉は「恋人、異性の友達、女友達さうした様々な親しい人々との「語らひ」に慰めを求め、感じる性格だった」<sup>(7)</sup>のである。そこで、『和泉式部日記』も、帥宮を失った悲しみを二人の恋愛について語ることに、慰められたいという契機から執筆されたのではないかと思われる。

十月頃、昼間宮は和泉の所を訪れ、連歌を詠みあい、宮邸入りを勧める。その後、葛城の橋を歌材にした贈答が行われ、それにつづく地の文に「慰む」が使われている。例九である。

行なひの験もあらば葛城のはしたなしとてさてややみなんなどいひて、ありしよりは時々おはしましなどすれば、こよなくつれづれも慰む心地す。

これは例一のように、帥宮との交情で自然に「つれづれ」の「慰む」和泉の姿が描かれているところである。

『和泉式部日記』には「つれづれ」が十六例、「つれづれのなくさめ」としては六例使われ、その中の五例が和泉の状態である。

この作品には「つれづれ」の思いが冒頭から終わりまで一貫して流れており、帥宮邸に入った和泉が自分の家でのことを「つれづれなりし古里」(一〇二)と思ひ出す場面もある。「つれづれ」について、清水文雄氏は客観的把握に因る「孤独」な状態と、自己凝視によって、みずから「孤独」な存在であることが内省されたとき感ずる主体の心情としての「孤独感」とにまたがる状態を意味するとする。『和泉式部日記』の場合、「つれづれの慰め」の「つれづれ」の五例は、帥宮との忍び恋を重ねていく和泉を取り巻く「孤独」な状態と、その状態に置かれている彼女が感じる孤独感を意味する

のである。例一の「つれづれ」の背景には亡き宮の影があるとすでに述べたが、この例九の「つれづれ」は和泉が宮との恋の最中に依然として感じ続けるものである。そして、それがまた帥宮との交情——宮の訪問で慰められるという成り行きになる。例一は二人が出会ってまもない頃で、「少し」「慰む」と言っているのに対して、二人の恋愛が深まった十月頃、特に贈歌だけではなく、宮自身が今までよりしばしば訪れる——それは宮と直接に語りあえることである——ので、「こよなく慰む」と書き分けられていることもわかる。

この例九は前に取りあげた例一のように、日々の経過と共にある時期までの二人の交情を総括して、和泉の心の状態を表すものとして「慰む」が使われている。この二つの例は、ある具体的な場面ではなく、帥宮との歌の贈答や宮自身の訪れによって孤独が紛れるという彼女の心の状態をひっきりぬめて表現したものと見える。それは、個々の事実の記述よりもっと和泉の心情を正確に代弁してくれるものである。

また、引き歌を用い、慰められたい気持ちを表した手紙文、例四がある。

か、れどもおぼつかなくも思ほえずこれも昔のえにこそあ  
るらめ

と思ひ給ふれど、慰めずは、つゆ」と聞えたり。

二人は出会い、契りを結び、後朝の歌を詠み交わす。亡き宮を哀惜する身でありながら、弟宮の恋を受け入れたことに思い乱れる和泉。いつもの小舎人童が訪れるが、宮からの便りはない。帰る小舎人童に和泉は歌を託す。宮は彼女を「げにいとほしう」と思うもの

「慰む」を通してみた「和泉式部日記」

の、北の方への遠慮や彼女に対する噂を気にして訪れることはない。例四は宮の歌「ひたぶるに待つともいはばやすらはでゆくべきものを君が家路に」に対する和泉の返事である。「慰めずは、つゆ」は「慰むる言の葉にだにか、らずは今も消ぬべき露の命を」（後撰和歌集）、恋心によるもので、上旬で宮のお越しがなくても心細いとは思わないと強気を見せているものの、この一言で、やはり慰めてもらいたい気持ちを表している。

十月夕暮、和泉が帥宮を「慰むる君」と歌った歌、例十もみえる。色々に見えし木の葉も残りなく、空も明かう晴れたるに、やうく入りはつる日影の心細く見ゆれば、例の聞ゆ。

慰むる君もありとは思へども猶夕暮は物ぞかなしき

秋の夕暮、心細く物悲しい時、その風情に浸って、和泉はどうしようもない侘しさを感じる。彼女の宮廷入りの気持ちがあはれ、宮の物忌みの所へうかがうなど、二人が睦まじくなった時期の贈歌である。和泉が帥宮を「慰むる君」と歌っているのは、今まで帥宮との「かたらひ」——例二、三のように直に話し合うこともあるが、忍び恋の二人は主に歌による「かたらひ」であって、この場面に至るまで作品に書かれているだけでも、すでに百十八首の歌が詠み交わされているのである——で淋しさを慰めてもらったからであろう。和泉は折にふれて、「なべての御様にはあらず、なまめかし」（一六）「宮の御さま、いとめでたし」（七二）「猶折節は過ぐしたまはずかし」（五二）など宮の容貌や情趣を理解する心を評価しているが、「慰むる君」とは彼女を慰めてくれる人として帥宮を全面的に評価していることである。この歌からも、二人の恋愛のあり方

がわかるのである。

以上のように、『和泉式部日記』には帥宮との「かたらひ」や和歌の贈答、宮の訪問などで、「慰め」を求めたり、慰められたりする和泉の姿が繰り返して描かれている。「語らば慰むこともありやせん」という帥宮の歌いかけから、宮との「かたらひ」——直に語りあうことや歌の贈答で「かたらふ」こと——を重ねて、宮邸入りの決意を固める十月頃には、和泉にとつて帥宮は「慰むる君」になつてゐるのである。

### Ⅲ

次は帥宮が「慰め」を求める場面、例五と例八についてみよう。

なほいとをかしうもおはしけるかな、いかで、いとあやしきものに聞しめしたるを、聞しめしなほされにしがな、と思ふ。宮も、いふかひなからず、つれづれの慰めにとはおぼすに、ある人々聞ゆるやう、「このごろは源少将なんいますなる。昼もいまずなり」といへば、

六月、月の明るい夜、和泉への疑いをもつてゐる帥宮はそれを確かめに訪れる。すぐ帰ろうとする宮に「こゝろみに雨も降らん宿すぎて空行く月の影やとまると」という歌を送り、宮をしばらく引き止める。この歌は『古本説話集』にも歌の威力を示したものととして取り上げられている。才気煥発で、男心に強く訴えかけてくる歌である。右の文章のように帥宮が和泉を恋愛の相手として認めたのは、和泉の歌の才能を高く評価したからであろう。例五の後の記事になるが、帥宮が和泉に代詠を依頼するところ、十月頃、月を題

材にした贈答の後に、次のような記述がある。

あはれといひつべからんことなん一ついはんと思ふに、それよりのたまふ事のみなんさはおぼゆるを、一つのためへ（五七）  
なほくちをしくはあらずかし、いかで近くてかゝるはかなし（七〇）  
ともいはず聞かん、とおぼし立つ。

帥宮は和泉の歌に感動し、彼女の資質を認め、和泉を側に置き、歌を聞きたいと思うのである。二人の恋愛は贈答歌の詠みあいによつて成り立つたものであり、実際、この作品に百四十七首（連句一句も一首と数えた）もの歌が詠み込まれている。すぐれた歌の詠み手、和泉と彼女との贈答を樂しむ帥宮。帥宮は和泉を「共に語るに値する人」として認め、彼女との交情——歌の贈答で「つれづれ」を「慰め」ようとするのである。

この例五は、宮が侍従の乳母から和泉のことで諫められた時の言葉「つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ」（二一九）とは同じようでありながら異なる。和泉とは真剣な恋愛ではないと弁解している帥宮の言葉は乳母に向けられたものである。それに対して、例五は、宮の心中思惟を作者和泉が間接的に書いたもので、ここの「つれづれ」は和泉と同じ意味、響きで使われており、すでに和泉の「つれづれの慰め」のところで述べたように、わびしい孤独感をさしている。和泉だけではなく、帥宮にとつても二人の恋愛は歌の贈答で孤独を慰めあうことであると、和泉は理解していることになる。

また、十月、帥宮が和泉に宮邸入りを勧める場面、例八をみると、「つれづれ」な和泉の姿とともに宮の孤独感、無常感が述べられて

おり、帥宮もそこからの慰めを求めている。

行なひなどするにだに、たゞ一人あれば、同じ心に物語聞えて  
あらば、慰むことやある、と思ふなり」などのたまふにも、

帥宮は和泉が多情な噂にもかかわらず、世馴れた女ではないことに  
気付き、和泉を見なおし、いとおしく思う。二人の心は寄りあい、  
帥宮は「いとかくつれぐにながめ給ふらんを、思ひおきたること  
なければ、たゞおはせかし」(六一)と、宮邸入りを勧めるように  
なる。和泉の「つれぐ」な状態が宮邸入りを勧誘する契機になっ  
ている。そして、例八のように、一人でいて当然のはずの仏前のつ  
とめにまで和泉と共にいたいという帥宮の思いが述べられるように  
なる。『和泉式部日記』および他の文献の考察によつて、帥宮は強  
い無常感を持ち、仏教に傾倒し、出家の願望をもつていたことが  
わかる。そこで、帥宮の和泉への接近は、単なる好色の行為だけで  
はなく、いくら仏にすがつても完全に解消しきれない、みずからの  
不安、恐れ、苦悩を共有しあい、語りあう相手を欲していたからで  
はないかと指摘されているのである。帥宮において、宗教への思  
いと和泉との交情はお互いに反するのではなく、同時に求めること  
であるというのが、仏前のつとめを和泉と共にし、「同じ心」で語  
りあいたいという例八の場面からも読み取れる。帥宮は共に「かた  
らふ」人として、和泉を求めていると和泉は書き留めているのであ  
る。

同じく和泉も宮邸入りを「つれづれのなぐさめ」のためと言つて  
いる。二人の恋愛の基調が「つれづれのなぐさめに」あり、その恋  
愛の延長線上に宮邸入りが考えられているのである。例十一であ

「慰む」を通してみた『和泉式部日記』

る。

なにの頼もしきことならねど、つれぐのなぐさめに思ひ立  
ちつるを、さらにいかにせまし、など思ひ乱れて聞ゆ。

和泉がやつと宮邸入りの決意を固めたところ、帥宮は出家の意志  
をほのめかし、和泉をまどわせる。宮が「つれぐならば」私の邸  
へ来ませんかと誘つたように、和泉は別に頼もしいことがあるわけ  
ではなく、ただ「つれぐのなぐさめ」に宮邸入りを決心したので  
ある。「つれぐのなぐさめ」のためとは非常に軽いようでありな  
がら、重いものである。和泉は「この宮仕へ本意にもあらず」(八〇)  
としている。出家の願望もあり、また親姉妹および子供たちを見届  
けたい気持ちもある。それに宮邸に入ったところで都合なことが  
起きることも目にみえている。それにもかかわらず、「つれぐの  
なぐさめ」に宮邸入りを選びとつたのである。宮邸入りに対し、和  
泉と帥宮が同じ認識をもつていることになる。

このように、和泉だけではなく、帥宮も彼女との「かたらひ」、  
歌の贈答で「つれづれ」や無常からの慰めを求めていると和泉は受  
けとめている。恋愛というものが、主観的で相対的なものであると  
考えれば、客観的な把握より相手にどうとらえられているのかが  
もっと重要である。和泉がこのような記述をしたのは、逆に言えば  
彼女が帥宮のその思いを受信できる受皿をもち、常に帥宮との交情  
で慰めを求め、帥宮もそれに応えてくれたからであろう。二人が恋  
愛に同じ期待をよせたからこそ、いろいろな波乱を乗り越えて二人  
は歩み寄っていくのである。まさしく『和泉式部日記』の特質とい  
われている孤独感や共感性は「同じ心」で語りあつて、孤独や

無常を慰めあおうとする二人の姿によく表れていると言えるであらう。

## IV

次は、宮との交情で「慰め」を求めている和泉の姿を見つめていく、もう一人の和泉が複眼的に書かれている場面についてみよう。和泉が石山詣でに出かける経緯が描かれている、例六、七。

人はいさ我は忘れずほどふれど秋の夕暮ありし逢ふこととあり。あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなし事に、世の中を慰めてあるも、うち思へばあさましう。

かゝるほどに、八月にもなりぬれば、つれづれも慰めむとて、石山に詣でて七日ばかりもあらんとて、詣でぬ。

右の三条西家本のように「あはれにはかなく、頼むべくもなき」を「かやうのはかなし事」を修飾するものとみず、この部分は「三系統本を対校して二系統の本文が一致した場合は、他の一系統の本文よりもその二系統の本文の方が大体において正しい」という説(十三)に従い、「あはれにはかなく頼むべくもあらず」と文章を切り、前の帥宮の歌に対する直接的評価とみなした。そして、「かやうのはかなし事に」以下は、すでに述べた例一のように、今までの宮との贈答に対する和泉の気持ちをもとめて表したものとみた。

この作品では歌の贈答を「よしなしごと」、「はかなし事」、「はかなき事」と言っている。ここの「はかなし事」について「事態の進展」式部の生命の燃え立つような充実感を伴わない贈答の繰り返(十四)し」を意味するとするが、贈答の内容についての表現ではなく、

むしろ和歌自体の客観的な属性や本質をそのように認識していることである。——不確かな、とりとめのない、かりそめの、頼りにならないものという一種の文学の虚しさを言っているものである。

そんな「はかなし事」に「世の中」を慰めている自分を顧みた時に、情けなく思われるのである。これは単なる宮との恋の渋滞によるものではなく、自分を冷静な目で見つめた時の詠嘆で、恋の虚しさ、無常感につながるものである。そんな思いを振り切ろうと石山寺詣でに出かける。石山詣では、単なる物見遊山ではなく、虚しさ、孤独感から逃れるためのものである。それはこれまで帥宮との交情で「慰め」を求めたこととは対立する方法として位置づけられる。

しかし、和泉は仏に専念できず「古里のみ恋しく」思い、逢坂山を境界に帥宮と七首の贈答歌を詠み交わす。結局仏によってではなく、「はかなし事」、すなわち帥宮との和歌の贈答より慰められるのである。そして、「山を出でて暗き道にぞたどり来し今一たびの逢ふことにより」(四九)と帥宮に走る自分の思慕の情をすなおに詠みあげ、また帥宮との恋愛に身を投げ出すのである。

次は例六と同じく、宮との恋愛に身をゆだねている和泉がまた感じる虚しさが記されている所である。例十二。

冬の夜の目さへ氷に閉ぢられて明かしがたきを明かしつるかな

などいふ程に、例のつれづれなぐさめて過ぐすぞ、いとほかなきや。

十二月、和泉がとまどいながらも宮邸入りの意思をかため、帥宮とむつまじく贈答を繰り返すところなのに、「いとほかなきや」と



いう詠嘆が発せられている。

藤岡忠美氏は日記全体には和泉を、さめた目で眺めている和泉自身がずっと存在するとし、そのさめた意識は、特にこの作品においては「日記の基調と化しているものであり、恋のむなしさをくりかえし主張するもの」であり、その意識が極めて明らかに記されているところとして、例六と例十二をもあげている<sup>千五</sup>。

そのさめた意識が「慰む」を含む文章に多く表れているのは、「慰む」の本質と関わるものであろう。「慰め」には死、人間のつて生まれた孤独や宿命など、人間としてどうすることもできない状況が背景にある場合が多い。それをいろいろな方法でなんとかしようとするものの、根本的に解決することはできず、一時的に紛らわせないで、例六と例十二の和泉の詠嘆はもつともだと言える。また、日記文学には作者が作品の中で生きている時点とその作品を書く時点の、二つの時点が共存するが、これらの場面は和泉がこの日記を書く時点、すなわち、帥宮の死によってその恋のむなしさをつくづく知らされた後の和泉の観照が重なっていることもあろう。

今までの例は、和泉と帥宮が恋愛——「かたらしひ」、歌の贈答で「慰め」を求めあう場面であるが、例外が一例ある。和泉の宮邸入り後、実家に戻る決心をした帥宮の北の方が姉宮へ送った手紙文、例十三である。

帥宮の北の方は「宮たちをも見たてまつり、心もなぐさめ侍らん」と思っているのである。子供を見ることで、心が「慰む」のである。『枕草子』の「つれづれなぐさむもの」の段に「二三四つばかりなるちごの、物をかしよう言ふ。また、いと小さきちごの物語したるが、

「慰む」を通して見た『和泉式部日記』

ゑなどいふ事したる」という記述があるが、例十三の場面は「女」や「宮」に対する記述とは違って、『枕草子』に取り上げられているような一般論にとどまっている。この作品の最後の部分に「宮の上御文書き、女御どのの御ことば、さしもあらじ、書きなしなめり、本に」(一〇五)という記述があるように、これは和泉の想像による文章であり、したがって一般論にとどまっているのである。

## V

これまでは『和泉式部日記』についてみてきたが、和泉と帥宮との恋愛の軌跡は和泉の歌集の帥宮挽歌群を通して察することができる。その挽歌群にはすでに述べたように、「慰む」が八首に用いられている。

いかにせんとのみおほゆるままに

慰めにみづからゆきて語らはん憂き世の外に知る人もがな

(九六六)

何心もなき人の御有様を見るも、あはれにて

わりなくも慰めがたき心かな子こそは君が同じ事なれ

(九九二)

梅の花を見て

手折れどもなに物思ひもなぐさまじ花は心の見なしなりけり

(九九七)

語らふ人の音もせぬに、同じ御思ひの頃

慰めん方のなければ思はずに生きたりけりと知られぬるかな

御服になりし頃、「月の明かきは見きや」とあるに  
(一〇〇九)

慰めんことぞ悲しき墨染の袖には月の影もとまらで

(一〇一三)

宵の思ひ

月にこそ物思ふことは慰むれ見まほしからぬ宵の空かな

(一〇三七)

宵の思ひ

慰めて光の間にもあるべきを見えては見えぬ宵の稲妻

(一〇四〇)

夜中の寢覚

なかなか慰めかねつ唐衣かへして着るに目のみ覚めつつ

(一〇五〇)

和泉の歌集の「花を見て春は心もなぐさみき紅葉の折ぞ物はかなしき」(二八四)「花もみな夜更くる風に散りぬらん何をか明日のなぐさめにせん」(二六〇)「月影を憂くも隠すか見てだにも慰めがたき夜はの心を」(二五二四)の歌のように、人は普通花や月など美しい自然を見ると、自然に「慰む」のである。一五二四番の歌は逆の気持ちを書いておられるけれども、月を見ると「慰む」という考えが根本にある。しかし、悲しみや苦しみが深いとそうはいかない。帥宮挽歌群には、月を眺めて心を紛らすのが、かえって悲しく、月を眺めるところの気持ちではない(一〇一三)、月さえも見えない慰められない「宵の思ひ」(一〇三七)、梅の花を見ても慰められない(九九七)悲しみが歌われている。

また、「ながむるにつけて心のなぐさむは都の人のかたみなりけり」(二五四〇)のように形見を見ると、心が紛れるが、帥宮挽歌群には帥宮の形見の御子を見るにも慰められない(九九二)心情が歌われている。

すでに述べたとおり、「かたらひ」による「慰め」を求めた歌(九六六)や「語らふ人」に打ち明けるしかみずから慰めるすがないといふ歌(一〇〇九)、そして、稲妻、夢の中にも帥宮に逢えず、恋しい心が紛れない(一〇四〇、一〇五〇)という、そんな和泉の切ない思いが、帥宮挽歌群の八首に詠まれているのである。

帥宮挽歌群には宮の死による慰められない和泉の心情が繰り返して歌われている。すでに言及したとおり、「慰む」の背景には死の影がひそめられている場合が多い。和泉は生前、身近な人として帥宮以外に、弾正の宮や最初の夫橋道貞、娘小式部の死を経験する。特に娘に死なれた和泉の悲痛は十数首に歌われているが、慰められないという表現はみあたらない。それなのに、帥宮挽歌群に繰り返して和泉の慰められない心情が歌われているのは、帥宮を失った喪失感が深く、和泉が帥宮との恋愛で絶えず「慰め」を求めたからであろう。

## VI

今まで「慰む」を通して『和泉式部日記』をみてきた。『和泉式部日記』の恋愛は「式部の女としての深い孤独感に根ざすもの」(七七)とするが、それにとどまらず、常にその孤独や「つれづれ」、無常を、帥宮との「語らひ」や和歌の贈答で慰めあおうとするものであろう。

また、帥宮も彼女との交情で「慰め」を求めていると和泉は書き記している。それは宮との交情で慰めを求める和泉の期待に帥宮が常に応えてくれた思い出に基づくものであろう。この作品の特質と言われている孤独感や共感性は「慰め」を求めあう二人の姿からも見いだせるのである。

二人の恋愛は「語らば慰む」ものであり、二人はお互いに共に語るに値する人である。だが、忍び恋の二人は逢つて直接に「かたらふ」機会は少なく、贈答歌を詠み交わし、「慰め」を求める恋愛を展開していく。歌による「かたらひ」とも言える和歌の贈答は、二人の愛を進展させる不可欠のものになり、『和泉式部日記』は百四十七首もの贈答歌によつて綴られた歌日記のような様相を示すようになるのである。

また、帥宮の死後、和泉の慰むすべのない悲しみは帥宮挽歌群に切実に詠まれており、和泉がもつぱら帥宮との交情——「かたらひ」でのみ慰められたことが再び認識させられる。そこで、『和泉式部日記』という作品も宮を失つた悲しみを二人の恋愛——それは「呉竹の世々の古言おもほゆる昔語り」（九七）のようである——について、誰かに語つて慰めてもらいたい思いから執筆されたのではなからうか。和泉のように恋愛を通じて「慰め」を求めることは、誰にもありうる、誰もが願うことでありながら、実際実現するのは難しく、帥宮との恋愛を築きあげた彼女だけの独特の世界でもあろう。そして、帥宮の「夕暮は誰もさのみぞおもほゆるまづいふ君ぞ人にまさされる」（八六）という歌のごとく、『和泉式部日記』という作品を書いた和泉の「慰め」を求める心情は人にまさっているであらう。

「慰む」を通してみた『和泉式部日記』

しかし、恋愛を通じて「慰め」を求めるのは、また「はかなし」ものである。それを見極めながらも、帥宮との交情で「慰め」を求める和泉の姿が繰り返して描かれているのが『和泉式部日記』であらう。

### 注

一 「慰む」という時には「慰め」をも含める。

二 (ア) 清水文雄、『つれづれの源流』（国語教育研究）六・

七・九、一九六二年十二月・一九六三年五月・一九六四年十

一月）『和泉式部研究』（笠間書院、一九八七年九月）に入る。

(イ) 円地文字・鈴木一雄、『全講和泉式部日記』改訂版、至

文堂、一九八三年十月

三 『和泉式部日記』の本文の引用は、三条西家本を底本に用い

た岩波文庫本『和泉式部日記』による。括弧の数字はその頁

を示す。

四 『源氏物語』の引用は日本古典文学全集『源氏物語』による。

五 吉田幸一、『和泉式部研究』一、古典文庫、一九六四年十月、

二九六―二九七頁

六 和泉式部の歌集の歌と歌番号は、岩波文庫本『和泉式部集・

和泉式部統集』による。括弧の数字はその歌番号を示す。

七 佐伯梅友・村上治・小松登美、『和泉式部集全釈・統集篇』、

笠間書院、一九七九年十月、二八二頁

八 注二の(ア)に同じ

九 森田兼吉、『和泉式部日記論攷第二』、笠間書院、一九八八年

- 九月、二三七―二五三頁
- 十 注九に同じ。二五二頁
- 十一 注二の(イ)に同じ。三一六頁
- 十二 木村正中、「和泉式部日記の特質」(『日本文学』、一九六三年二月) 日本文学研究資料叢書『平安朝日記Ⅱ』(有精堂、一九七五年十一月)に入る。
- 十三 森田兼吉、『和泉式部日記論攷』、笠間書院、一九七七年十二月、七六―七七頁
- 十四 注二の(イ)に同じ。一六二頁
- 十五 藤岡忠美、日本古典文学全集『和泉式部日記』、小学館、一九七一年六月、二八頁
- 十六 『枕草子』の引用は日本古典文学全集『枕草子』による。
- 十七 木村正中、「主題の形式」(『王朝女流日記文学必携』、学燈社、一九八六年)